

せとる くおーたりー C. E. T. L. Quarterly

教育・学習活動支援センター広報 No.34

発行日 16. Mar. 2009

巻頭言 アメリカの教育における保護者の役割

国際部長 小出 稔

2005年8月から翌年3月迄、在外研究の機会を得てアメリカ・ワシントンDCに滞在し、当時小学一年生だった息子を地域の公立小学校に通わせたことがあった。突然異国の小学校に放り込まれた息子は気の毒だったが、保護者の立場からアメリカの公教育を経験する貴重な機会となった。この時、アメリカの公教育の過程において親に期待されている役割が日本よりかなり大きいように思えた。筆記試験で評価されることが多い日本では、親に期待されるのは、子供を良い塾や学校に送るための経済的余力である。やや極端な言い方をすれば、わが子の試験の点数を効果的に上げてくれる環境を整えることが親に課された役割であり、そのような役割を果たすには、お金が全てではないが、お金が無ければ始まらない面も否めない。

アメリカの学校における子供の評価は、もちろん勉強面でもなされるが、それ以外の社会生活面や行動面も大きな比重を占める。例えば、いわゆる机に向かってする勉強のために、社会への関わりや、身体・情操面の鍛錬等を犠牲にする日本の典型的な受験生のパターンを、アメリカの高校で実行したら、一流と言われる大学への入学は難しい。そのようなスタイルはアメリカの教師たちに受け入れられず、当然先生たちから良い推薦状も期待できない。アメリカの大学入学審査において、教師の推薦状は大きな

比重を占めるから、結局良い大学への入学はおぼつかなくなるというわけだ。

アメリカの学部や大学院に入学するために必要な客観テストであるSATやGREを日本人が受けると、英語の部分が難しいのはともかく、数学（というかほぼ算数のレベル）の部分は妙に易しく感じるだろう。おそらく、英語と数学で極端なレベルの差は無いだろうから、もし自分が英語のネイティブスピーカーなら、英語も同じくらい簡単で、結局SATにしてもGREにしても楽勝の試験で、こんな試験を受けているアメリカ人学生は実はレベルが低いのではないかとも思ってしまう。

けれども、ここに大きな誤解がある。確かにSATやGRE自体を見れば、日本のセンター試験の方が数段難しい。大体、ちょっと日本語を勉強した外国人学生が受験できるような代物ではない。しかし、これは、センター試験が、その点数のみによってでも合否判定を行える試験だからだ。つまり、日本のセンター試験では、受験者中何番目であることが厳密に判定されなければならない。一方、SATやGREは、そのスコアだけで合否が決まるという性質の試験ではない。アメリカのSATやGREでは上位20%に入るくらいなら一流大学への入学は可能であり、そこから更に上位10%、果ては上位5%や1%を目指してしのぎを削る必要は無いのだ。

では、アメリカの大学は、どのようにして志願者の合否を判別するのか。この時、大学への志望理由等を書く個人のエッセーと、学校の教師が提出する推薦状、そして高校での成績が非常に重視される。日本人は、どうもエッセーや推薦状という、何か曖昧模糊とした基準のように思う傾向がある。「言葉は言い様」であり、「口八丁手八丁」で、そんな物で果たして客観的な合否判定が可能かと訝しがるのだ。

そのように思う人は、機会があれば、一度でも他人の書いた作文を読んでみればいい。意外なほど、「良い」作文、よく思索された「深い」内容の作文、「論理的で読みやすい」作文等々を判別するのはたやすい。比較すれば瞭然だ。体験と思索に乏しい文章は、その内容が画一的になる傾向があり、読んでいてつまらない。眠くなる。「良い」文は、内容的に面白いから、読みやすい。すると、日本では小手先の「良い作文を書く方法・テクニク」に関するマニュアル本の登場となる。しかし、アメリカで大学の入学審査の際に提出するエッセーは、基本的に時間的制約の無い中で自由に書ける文章である。だから、技術的な側面からの制約はあまり無く、むしろそこで表現する内容自体で勝負することになる。この時、社会的経験や体験的思索に乏しいと、その内容は得てして抽象的・一般的となり、要は誰でも書ける作文になってしまう。个性的かつ具体的で、創造性と説得力に富む文章は、どうしても具体的な体験を思索によって掘り下げることでしか書けない。このような豊かな社会的経験と思索を積極的に求める学生をアメリカの教師たちは高く評価する。

ところで、このような豊かな社会的経験や、自身の才能を積極的に伸ばそうとする体験は、積極的に親が方向付けてこそ、子供は積むこと

ができる。日本の場合は、机上の知識が問われるので、親が放っておいても、成績のいい子が育ち、レベルの高い大学に行ってくれることもあるかもしれない。それと比べると、アメリカは、親がどう関わっても子供の成績が良くないことはあると思うが、親が教育に関わらずに子供の成績が良いということは有り得ない。

実際、息子を現地の小学校に通わせていると、子供に親がかなりの程度関わらなければ、子供が普通の学校生活を送ることすらできないように思われることが多かった。毎日の宿題を親がチェックするのは当たり前で、宿題提出のフォルダーには、親がその宿題を確認したというサインをする書類が挟まれている。バスケットや水泳、ロッククライミングやスケートボード、マーシャルアーツや体操など体験できるスポーツはどんどん親が連れて行って体験させる。ピアノ・バイオリン・ダンス・絵画等、芸術関係の習い事も盛んだ。また、子供科学教室とでも呼べるような体験重視のワークショップ型授業が、地域のいくつかの小学校で順番に生まれ、これも親が連れていく。積極的に子供の教育に関わる親の子供たちは、学校の提供する学習プログラムや行事に積極的に参加することになり、結果的に教師の評価も良くなる。

アメリカは地理的にも治安的にも（更に、多くの地域で、7歳以下の場合は法律的にも）、子供は保護者が付いていなければ学校以外はどこにも行けない。放課後他の子供と遊ぶにしても、親同士が連絡を取り、車を手配して、友達と会う機会を提供しなければならない。放し飼いか状態で、勝手に近所の子供たちと遊んでいた自分の少年時代とはかなり違う。ちなみに自分の両親は、自営業を営み、夫婦共働きだった。学校から帰って母親が家にいたためしが無い。学校

行事等への参加も最小限だったように思う。大
体、幼稚園に入園して最初の誕生会だったか、
他の友達も皆、母親は当然のこと、両親までそ
ろっている子もいるのに、自分は最後まで一人
だった。誕生会が終わる頃、息を切らして駆け
つけた母親を見つけた時、なぜか涙がにじんだ

のを覚えているが、このような調子でいるうち、
いつの間にか親が学校に来ると恥ずかしくなる
年になっていた。両親に対して恨む気持ちは露
ほども無く、むしろ感謝の気持ちだけを抱いて
いるが、もしかしてアメリカだったら、大学教
員にはなっていなかったかもしれない。

2008年度FDフォーラムを開催

12月13日（土）に2008年度創価大学FDフォー
ラムが開催されました。本フォーラムは、2003
年に教育・学習活動支援センター（通称：CETL）
の教育・学習支援の取組が文部科学省「特色あ
る大学教育支援プログラム（特色GP）」に選定
されたのを契機に、その後毎年実施されてきま
した。

昨年度まではCETLが主催してきましたが、今
回からは、FD義務化の流れを受けて発足した全
学FD委員会（委員長：馬場善久副学長）主催に
変わりました。その意味でも記念すべきFDフォー
ラムの開催だったといえるでしょう。

午前の部（9時45分～11時30分）の基調講演
には名城大学副学長の池田輝政先生を講師にお
迎えしました。「大学に求められる“教育本気度”」
と題する講演に、150名を超える学内外の参加者
が熱心に耳を傾けました。

池田輝政先生は、FD（Faculty Development：
教員研修）、SD（Staff Development：職員研修）、
OD（Organizational Development：経営研修）
が一体になり発展することこそ、大学改革を
推進する“FD”の本義があることを力説しまし
た。FDは「魅力ある授業づくりのチーム開発力
の向上」、SDは「授業づくりの教務企画力とサー
ビスの向上」、ODは「授業づくり支援プロジ

ェクトへの投資」に主な任務があるとされ、こ
れらが相互連携を図りつつも、それぞれが発展
する大切さが強調されました。



名城大学副学長池田輝政先生

午後の部の前半（12時40分～14時50分）には、
①基礎演習の工夫について②アカデミック・ア
ドバイザーの活動について③PBL（プロジェクト/
プロブレム解決型学習）入門④LTD
（Learning Through Discussion）入門⑤ポータル
サイトの活用法⑥英語プレゼンテーション技能
講習の6つの分科会が用意され、日常的な教
育・研究活動についての情報交換が行われまし
た。また、午後の部の後半の全体会では、経営
学部、文学部、教育学部それぞれ独自のFDに関
する事例報告に基づいて、フロアとの活発な意
見交換が交わされ、教育・研究改善に向けた情
報の共有化が図られました。

CETL勉強会「三重大学でのPBLの取り組み」を開催

10月17日（金）にA棟8階会議室にてCETL主催の勉強会が開催されました。講師には、三重大学高等教育創造開発センターの中西良文先生にお越しいただきました。

週末5時限目にもかかわらず、20名を超える参加者が三重大学の先進的なPBL（Problem/Project Based Learning）の取り組みについて、体験的に学びました。中西先生からの報告を受けた後、PBLの教育的意義や実施の課題に関する活発な議論も交わされました。

PBLは問題・課題解決学習とも呼ばれ、特に初等教育では一般的な授業方法です。近年では

この手法が高等教育にも普及しはじめています。

CETLは授業改善を支援していますが、その中身の一つとして、主体的な学習を促せるPBLの試行に取り組んでいます。



PBLについて話し合う参加者

実施報告：「書評の書き方講習会」の開催

CETL助教 安野 舞子

2008年10月から11月にかけて、CETLと図書館の共催で「書評の書き方講習会」を実施しました。図書館では、5年前から「全学読書運動（愛称Soka Book Wave、略してSBW）」を通して学生の読書力・文章力向上を図る取組がなされてきており、その運動の一環として「読書力認定制度」が設けられています。これは、提出された感想文や書評文の質・量を基に、学生の読書力を等級付けする制度であり、この制度に挑戦する学生の数は年々増えています。

そこで、FDフォーラムにおける「図書館データベース活用講習会」の共催といった、これまでのCETL—図書館の協力関係を活かし、SBWの「読書力認定制度」を下支えする企画として、今回、「書評の書き方講習会」という課外学習支援のコラボレーションが実現しました。

定員を20名とし、若手教員2名（中堀正洋文学部助教、安野舞子CETL助教）による講義およびグループ・ワークの形式で、全3回にわたり講習会を行いました。また、「実際に書評を書いてみるのが大切」と考え、当時ベストセラーとなった新書『悩む力』（姜尚中 著、集英社）を課題図書として受講者全員に支給し、講習会期間中2度にわたり書評文を書いてもらいました。

10月1日に行われた第1回目の講習会には12名の学生が参加し、「書評の書き方」の基本について、講師が作成したレジュメをもとに講義を行い、最後に質疑応答の時間を設けました。

受講者には、次回講習会（10月31日）前までに課題図書を読み、書評文を書いて提出することが課せられ、第2回目の講習会では、提出さ

れた書評文に対して講師から全体的な講評を行い、添削済み書評文をもとに個別指導を行いました。2人の講師が個別指導をしている間、残りの学生は2つのグループに分かれ、課題図書をどのように読んだか、また、実際に書評文を書いてどうであったか等についてディスカッションを行いました。

講師による添削や個人指導、および学生同士のディスカッション内容をもとに、受講者は次回講習会（11月21日）前までに書評文を推敲することが課され、第3回講習会では、講師による総括的な講評の後、学生を2つのグループに分け、感想文を書評文に書き換えるワークを行いました（2回の講習会を経た段階でも、提出された書評文の中には感想文の域を出ていない

ものが幾つかあったため）。最後に全体で質疑応答を行い、活発な議論のもと、全講習日程を終了しました。なお、3回の講習会を通し、最後まで残った受講者は7名でした。

講習会最終日に行ったアンケートには、「クリティカルに書くことを学ぶことができ、また色々な目線から文章を書くことができ、本当に良かった」「エッセイや論文とは違うことを認識できて良かった。書評の全てを理解したわけではないが、書評の一般的なフォーマットを知ることができて勉強になった」「自分が書いた文章（書評）に対してコメントをもらったり、添削してもらう機会は有り難かった」等々の感想が寄せられました。

書評の書き方講習会を終えて

文学部助教 中堀 正洋

昨年の10月から11月にかけて計三回の「書評の書き方講習会」を担当させて頂いた。今回の講習会は、本学で初めての試みということもあり、どのように行なえば最も効果的な結果が得られるのか、講師である安野先生と何度も打ち合わせを行って臨んだが、それでもやはり講習会を進めるなかで、幾つかの改善点が出てきたように思われる。しかし、それを差し引いても、受講学生にとっては、実りある講習会となったのではないだろうか。

講習会を担当して感じたことは、第一に、本学の学生は読書量が比較的多いにもかかわらず、客観的に本を読む能力、著者の意見を的確に捉えるという能力が、読書量に比例しているとは言い難いのではないかという点だ。書評とは、簡単にいえば、本に評価を与えることだが、受講学生の提出した書評には、感想文の域を出ていないものが少なからずあったからである。

第二に感じたことは、本学の学生は書く作業に慣れていないのではないかという点だ。学生が、客観的に本を読み、評価を与えるという書評の書き方に慣れていないのは当然にせよ、読書を行ったうえで、その本の主旨や論点を的確に捉えて記述するという訓練が不足しているように感じたからである。

講習会ではこのような問題点を指摘しつつ、提出された書評を添削するという作業を何度か繰り返したが、このようなプロセスを経て、学生の書評は確実に改善されていった。この点で、今回の講習会は、学生に客観的な読書と記述の重要性を実感させる契機となり、学生の読み書き能力の向上に繋がったといえるだろう。今後も同様の講習会が定期的開催され、全学的な取り組みに繋がるなど、今回の講習会が多少なりとも役立てば、担当講師としても望外の幸いである。

CETL教育サロン「女性教員の情報交流会」を開催

1月22日（木）、CETLが主催する教育サロン「女性教員の情報交流会」が開催されました。

「女性教員限定」のサロンは初めての試みでしたが、本学の全女性専任教員の約半数が参加した会となり、こうしたイベントのニーズがいかに大きいかを認識されました。

多くの参加者からは、引き続きこうした会を持って欲しいという声が聞かれ、有意義なサロンとなりました。



活発に意見を交わす参加者

教職大学院の馬場百々子先生よりサロンに参加したご感想をいただきました。

「女性教員の情報交流会」に参加して

教職大学院教授 馬場 百々子

教育・学習活動支援センター（CETL）主催の教育サロン「女性教員の情報交流会」が、創価大学開学以来初めて行われた。学部・大学院・研究所等から集われた20名の女性教員は、関田一彦センター長の開催の意義と温かい励ましの言葉に和やかな雰囲気に包まれ、コーディネーターの安野舞子さんのリードで意義ある歓談のひとつきをもつことができた。

最初に、工学部生命情報工学科の伊藤佑子教授から、『創価大学の女性教員の現状—男女共同参画の定着を目指して—』と題して、創価大学の女性教員の実態が報告された。おりしも、国の施策として、平成21年度文部科学省女性研究者支援が打ち出され、女性研究者の立場を改めて考えるよい機会となった。

自己紹介から始まった懇談会では、創価大学のさらなる発展を期すためにも、若手の女性研究者・教員の育成を図るための体制（システム）づくりと各自の内なるバリアをいかにして超えていくかに話題が盛り上がった。女性研究者や教育者が、結婚して家庭をもち、育児や介護をしながらも、必要に応じた適切なサポートを受けることによって、男女ともに同じように当たり前前に働ける環境をつくることこそが、これか

ら大事になってくるのではないかと。英知の財産を新しい後継者に伝えていくためにも、このことは、避けて通れないように思う。開学以来38年間勤務され、これまで本学の発展の歴史とともに歩んで来られた教授からは、若手の研究者の現状を聞かれ、安心して働ける環境づくりの必要性が語られた。さすがに各分野で一流の研究をされてきた女性教員だけあって、語られる一言一言に味わい深い意見や提言がなされ、本学の未来志向、とりわけ、男女共同参画の定着を目指すためのよい示唆を得ることができた。

私自身、専門分野の異なる女性教員の皆様との歓談を通して、学内における専門分野の横断的な連携によって、多角的でより深い高度な教育を学生の皆様に提供できるのではないかと、新たな希望に胸が膨らんだ次第である。こうした取り組みによって、本学の三つの建学の精神に共通する「人間主義」に基づいた学問研究と教育の推進に寄与することができるものと期待するのである。

今回の交流会が開学以来初めて開催できたことに感謝するとともに、より有意義な語らいの場として、継続されていくことを念願するものである。

CETL主催の「ライティング・ワークショップ」を開催

12月6日、B203教室においてCETL主催のワークショップが開催されました。土曜日の9時半からの開始にもかかわらず、本学教員や本学卒業の小学校教員、教職大学院生や学部学生など、合わせて25名が参加して、17時まで多彩なプログラムに取り組みました。

講師には、岩瀬直樹先生（埼玉県狭山市立堀兼小学校教諭）と甲斐崎博史先生（東京都羽村市立栄小学校教諭）のお二人にお越しいただきました。両先生は『作家の時間』（新評論、2008年4月）の編者として知られ、初等教育の書き方に関する斬新な実践を探究されています。

「ライティング・ワークショップ（作家の時間）」は両先生が実践している作文指導法の一つです。実証的研究に基づく検証はないにしても、書くことが好きになり、作文技能が向上するなどの成果がすでに報告されています。

ワークショップの参加者から「小学校の作文はいよいよ取り組んでいただけ、子どものときこのワークショップをやっていたら、きっと作文が好きになっていたと思う」「自分が書いた文章が読まれるので、やる気がでます。きっと書くことが好きになれると思います」など、たくさんの感想が寄せられました。

講師の岩瀬先生は「創価大学の学生さんは、『ファシリテーターいらず』ですね。ぼくたちがいなくても学びがしっかりと成立していました」と振り返ってくれました。

大学生の日本語表現力、特に作文力の低下は多くの大学教員に共通の問題です。すでに初年次教育の課題として、レポートの書き方が講義され、共通・教養科目として日本語表現力を磨く講座を開講している大学も多くあります。ま

た、課外活動としてレポート添削指導、キャリア教育と称しての履歴書・自己アピール文作成指導、あるいは採用試験対策としての小論文講座など、様々な作文指導が行われています。

こうしたライティング技能の向上の取り組みが盛んになる一方で、レポートを返却しても受け取りに来てくれない学生、添削してもその修正から学べない学生、インターネットからのコピー&ペーストを繰り返す学生など、作文指導以前の問題を抱える学生も少なからず見られます。こうした学生に必要なのは、自分が書いた文章に対する愛着や誇り、自分の作文やレポートに対するオーナーシップ感覚です。

岩瀬先生と甲斐崎先生が探究・試行されているのも、こうしたオーナーシップ感覚を育みながら、それを土台にして書く力を高めていくことにあります。

CETLでは初等教育の実践を参考して、ライティングのリメディアル教育を模索しています。書くことに苦手意識がある学生に、書くことそれ自体を好きになってもらうこと。それを通して書く作法、表現力、論理的文章などを学んでもらうプログラム開発です。今回のワークショップはそのための端緒に位置しています。



お互いの作文を読みアドバイスを送る参加者

「創価大学・現代GPフォーラム」を開催します

3月7日（土）に本学大教室S101教室におきまして、「創価大学現代GPフォーラム：ICTを活用した自律的学習の推進」を開催します。平成19年度の「文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）」に採択されてから、本フォーラムは二回目となります。

基調講演には、私立大学情報教育協会会長の戸高敏之先生を講師にお迎えして、「私立大学におけるICT活用による教育改善の取り組みについて」をテーマにお話をいただきます。

さらに、東京学芸大学大学院教育学研究科の平井佑樹氏によるICT活用の関連事例「作問に基づく協調学習支援システムConcertoの開発と評価」も用意されています。

お問い合わせは、創価大学教育・学習活動支援センター（CETL）ICT活用教育推進部事務局まで。

TEL：042（691）2668 FAX：042（691）8158
e-mail: ict@soka.ac.jp URL: http://wbt.soka.ac.jp

開会挨拶 (13:00~13:10)	創価大学 学長 山本 英夫
基調講演 (13:10~14:10)	「私立大学におけるICT活用による教育改善の取り組みについて」 (社)私立大学情報教育協会 戸高 敏之 会長
休 憩 (14:10~14:25)	
取組紹介 (14:25~14:55)	「本学におけるICT活用教育の取組みと中間報告」 創価大学 工学部教授 勅使河原 可海・助教 高木 正則
関連事例 (14:55~15:15)	「作問に基づく協調学習支援システムConcertoの開発と評価」 東京学芸大学大学院 教育学研究科 平井 佑樹
休 憩 (15:15~16:00) ※この時間に本学WBTシステムの利用体験を実施します（25分程度）	
事例報告 (16:00~16:40)	「Collab Testを活用して得られた教育の醍醐味」 創価女子短期大学 准教授 南 紀子 「Collab Testを利用したグループ学習の事例」 創価大学 教育学部 教授 関田 一彦
閉会挨拶 (16:40~16:50)	創価大学 副学長 馬場 善久
情報交換会 (17:00~)	※会費制：3,000円 ※人数確定のため、参加を希望される方は事前にお申し込み下さい

編集後記

前期のマスマス・キャンペーンが数学のリメディアルなら、「書評の書き方講習会」や「ライティング・ワークショップ」は、国語分野のリメディアルです。この試みの芽を大きく育てることが今後のCETLの目標です。(U)

C. E. T. L. Quarterly No. 34

編集・発行

創価大学 教育・学習活動支援センター

〒192-8577 八王子市丹木町1-236

Tel：042（691）9782 内線 2146

E-mail：cetl@soka.ac.jp